

第4回

さまざまな去勢2

臍帯の去勢がされていないことと恐怖症

口唇的な去勢

肛門的な去勢

参加者：臍帯の去勢をあなたはどう定義なさいますか？

F・D：問題をひっくりかえしてみましょう。臍帯が去勢されていないということは、子どもが他者と融合状態にある、ということによってそれと理解できます。これは精神病や前精神病状態の大人たちにもみられることです。そこから抜け出すためには、治療でこの融合状態をある一定の期間認めることからはじめなければなりません。そして他者との融合状態をやめることへの恐怖感を、言語化させなければなりません。自分の分身を確立しなかった人たちは潜在的には精神病者ですし、そういう人たちが分身として使うのは、その子どもたちです。このようなケースでは、子どものほうが精神病になります。

臍帯の去勢がなされていないことは、ほとんどすべての恐怖症のなかで観察されます。人間は完全な個人としての自分自身のイメージは持っていないので、恐怖の対象をまえにすると、それが具現化されてしまうのです。つまり、ぜったいに自分に欠けていると思われる何か、恐怖症者には必要なのです。

たとえばある女の子がいました。彼女はおばさんがお母さんを迎えにくるときにだけ、学校に行くのです。

説明はすぐ見つかりました。お母さんが犬の恐怖症だったので、だれかに手をひかれてでなければ、犬がいる管理人室のまえを一人では通れなかったのです。

恐怖症者は二番目の身体、だれか別の人の身体イメージを必要としていて、危険と向き合うために自分には欠けていると想像する部分をその人から借りてきているのだと、わたしには思われます。

べつのケースも思い出します。6歳になる女の子でしたが、奇妙な症状のために連れてこられました。彼女は道端でとつぜんからだをふたつに折って、両脚のあいだから世界をながめ、非現実的な世界に埋没するのです。つまり道行く人々をさかさまに見るのです。お母さんがすぐに手をつないであげると、混乱は消えていきました。

じっさい面接をやっていくなかでわたしが気がついたのは、彼女がこういう体勢をとるのは、自分にペニスがあるかないかを見るためなのだということです。ただそれがこのおかしい症状に置き換えられただけなのです。からだを折り曲げる、両脚のあいだから世界をさかさまに見る、地面すれすれの状態、これらは身体イメージにおいてはほとんど胎児の状態です。

学校での彼女は極端な完璧主義者で、彼女からすると勉強面でなにも十分に完全ではないというありさまで、わたしが解釈したのはつぎのような言い回しで言えるようなことでした「もしわたしが完全でないなら、それは男の子のもってるペニスの部分が欠けているからだわ。男の子たちは完全をあらわしてるのよね」。そしてこう言うことによって、彼女は第一次去勢を終えたのです。

恐怖症はひとつの障害で、深刻な退行をもたらします。「わたしは、自律的存在であるという試練を生き抜くための装備が整っていないのだ」と恐怖症者は考えます。自律が達せられるのは、どんなものによってもどんなひとによっても、じぶんは切断されえないと理解した場合だけであり、かつ人がその性をもった存在として、自らと他者によって認められた場合だけなのです。

第一次去勢に触れるときには、臍帯の去勢にもどることを余儀なくされます。

子どもに第一次去勢について話すときには、かならずその子どもの欲望—その子はその性をもったものとして生まれることを欲望したこと—についても話さなければなりません。さきの女の子の例では、彼女は女性ですから、彼女は生まれたときから清廉潔白なのだということを説明しましょう。男の子の場合もおなじことを言いますが、どこか切断されるようなこともない、ということも説明します。なぜならその子に生をあたえたのはお父さんで、お父さんがその性を子どもに望んだのです、息子がまた生を与えるようにとね。

それからまた、親の生殖力、未来の生殖力にむすびつけた形でなければ、子どもに第一次去勢を与えることはできません。つまり、妊娠のような重要な原光景で生まれることの欲望と結びつけられていなければ、それをしてはなりません。

ある精神分析においては、この幻想の再生とそれにつづく抑うつ状態—死の欲動による—と人は言いますが—は根本的なものです。これは胎盤、この分身、子宮内部の双子をうしなうということについて、主体が最後までやりとげたということのしるしですし、主体が転移において、ことばによって、真正な分身を確立したことのしるしなのです。

臍帯の去勢とは融合者の去勢であり、ですから二者関係によって象徴化されるのです。いっぽうは母親で、これはまったく完全な存在です、もういっぽうは赤ん坊で、この子は部分対象を必要としています。

しかしこの部分対象はもはや臍帯のようなものではありません、それは臍帯の関係の昇華であり、液体状の食べ物にたいする関係ですが、それが臍帯を通過するかわりに口を通過することになるのです。

ここには入れ替えがあるのです。食べ物は口からやってくるようになるので臍帯は去勢されますが、臍帯は口によって満足を与える生体の諸欲動のなかに移しかえられるのです。大便の生体的排泄欲動のほうは小便の子宮のなかにひきつがれます。

たとえばお風呂のなかでうんちをする発達障害の子どもたちがいます。この場合はお母さんのなかにするというこのやり方について、彼らに絶対に話さなければなりません。これは目的としては近親相姦的なものです。そしてこのやり方を去勢しなければなりません。

「お母さんのお腹にいたときに君はうちをしたりものを食べたりはしてませんでした。ただ飲んだりおしっこしたりしていただけなの。じゃあ、お風呂のなかでうちをするってというのは、どういうことなのかな？もしかしてお母さんを殺したいと思ってるの？君自身を殺したいの？君は死にたいのかな？」

ある日子どもは言いました「そうなんだ」。それでわたしは「死ぬのは許されているけど、水のなかでうちをする以外のやり方でね。死ぬことについて話し合しましょう。」するとすぐその子は真っ黒な絵を描き始めました。

お風呂でうちをするというのは、じつのところ、ほとんど自己破壊的な欲動です。なぜならこれはかつて存在したことがないからです。かつて存在したことがある状況をまえにしたときには、われわれは太古的な満足を許可することができます。

でもかつて存在したことがない状況の場合は許可してはなりません。さもないとわれわれは逸脱行為と想像的自己破壊とを許可しているのだと子どもにとられてしまいます。

子どもにたいして道徳的であると、多くの人がわたしを非難するのはまさにこのせいなのですよね。たしかにそうでしょう、身体の発達についての道徳は必要不可欠なのだから。そうでなければ去勢された欲動の昇華に子どもが至ることは、ぜったいにないでしょう。それは、欲動をべつの方法で満たしつつける大人に、子どもが同一化することによってなされるのです。

たとえば成功する口唇的去勢はどのような経過をたどるか、見てみましょう。これは乳からはじまります。生まれてきた子どもは、乳をお母さんのおっぱいの場所に準備させます。ですから乳は子どもに属しているとどうじにお母さんの身体のなかにも存在する、そういう対象です。

このお母さん、彼女があたえる乳という意味では食べ物ですが、これはその乳房によってある機能的な道具でもあります。離乳のとき子どもは乳房を剥奪されますが、乳房を表象します。それはわれわれが抱えきれないほどたくさんの飴であったり、自分の口いっぱいにつめこむ粘土などの部分対象であったりします。そうやって子どもは乳房や哺乳瓶を嚙んでいたことを思い出すのです。

よろしいでしょうか。そういうときわたしはしばらくそのままにしておいてから、子どもに説明します。子どもに属しているのは乳だけであって、おっぱいはちがうのだということ、おっぱいはただ借りているだけだということをおね。なぜならこのおっぱいは子どもにしてみればお母さんの身体の延長であるとうじに、自分自身の舌の延長でもあるのですからね。

したがって子どもが話すようになるためには、このおっぱいにくっついていて子どもの舌を去勢しなければなりません。そしてこのためにこそ、お母さんがおっぱいをあげるのをやめる日に、姿を消すこともあってはならないのです。ぎゃくに埋め合わせとして幼児とじゃれあってスキンシップをはかります。お母さんは離乳についてことばにしましょう、それから話すため子どもが口に空気を入れることを学んでいることにも注意をむけましょ

う。

このお母さんの仲介—離乳から話すことへ—はとてもたいせつで、数週間続くかもしれません。でもこれをお母さんたちが教わっていることは稀です。それで母乳をあげるのをやめるとすぐ仕事に復帰したり、子守りに預けてしまうのです。これでは去勢された欲動の象徴化がおこなわれません。この象徴化が、肛門の口唇—肛門的な括約筋の欲動のあらゆる制御を指揮します。言い換えると、ことばを生み出す、筋肉を動かしながら発声する口の制御を指揮するのです。(口、これは飲み込みかつ嚙むものです)。口のこの肛門化はお母さんとの微妙な臭覚的關係をもつスキンシップをとおしてなされるのであり、これは乳房をこえてつづいているわけです。これらが欠けると、子どもは口唇欲動をことばによるコミュニケーションに昇華するにいたらないのです、つまりより繊細なもの、液体以上に繊細なものに昇華することができないのです。

今日われわれが出会う、子どもの言語障害のすべては、突然の離乳によるものです。子どもはお母さんとの肉体的なきずなから、彼の世話をしてくれるような人物の部分対象の位置に移行します。子どもはたんなるおっぱいのように操作されるのです。こういう場合、たしかに離乳はおこなわれていますが、あまりよい離乳ではありません。じっさいはモデルとして口唇欲動を象徴化できていない人物をその子もっています。その大人自身、離乳できていないので、したがってこの面で去勢されていないのです。

肛門欲動にかんしていえば、われわれの社会ではたいへんなレイプがあると思います、あまりに早い剥奪があり、したがってこれは耐えがたいものです¹。おなじような満足をもう二度と得ようとしてはいけない、その場所を、子どもが神経学的にコントロールすることができるようになるまえには、肛門欲動の去勢はまったく考えられないことです。このコントロールは脳の中樞神経系の完全な発達をもってはじめて可能になります。脊髄、馬の尻尾の完成、言いかえるならあらゆるものの完成、とくに下半身の完成にむかうあの細かな神経線維のことです。どうじにそれらは会陰にむかい、男の子の場合は尿管、陰囊の皮、足の裏にまで到達します。

この成熟がとげられたと分かるのは子どもがかなりの柔軟性を獲得したときで、つま先で立ち、跳んだり踊ったりできるようになる時期、つまり2歳ごろのことです。

かりにこの時期に男の子が清潔でいられないとすれば、それは男の子としての自分自身への同一化に達せられなかったからなのです。

その子が同一化したのはやぎや犬、あらゆるもの、またはお母さんにとっての快の対象または不快の対象だったのです。そうやってはばかりもなく自分の思いどおりにお母さんを支配し、お母さんが彼の世話をせざるをえなくするのです。

しかし息子にあまりにも早く清潔さを要求するお母さんは、ほんとうに殺戮ゲームに身をゆだねているのですよ。小さい男の子は膀胱や直腸がいっぱいになったことを理解でき

¹ フラストレーションは象徴産出的ではない。それは外傷的であり、最初にその性感帯に「する」聖なる快を切り落とすようなことである。

るような感覚手段を持っていないからです。それですべてをいっしょくたにして混同してしまします、性欲動も、肛門欲動も、尿道の欲動も。

小さい女の子の場合、事態はそれほど深刻ではないでしょう。なぜなら性欲動は肛門欲動・尿道の欲動とは混同されえませし、それ以降もつねに編成されなおすすめからです。ですからもし女の子がさきに述べたケースのようだった場合、これは臍帯の去勢がされていないということです。でもそれはこの子とおなじ身体をもっている人物に同一化しているということでしょう。

いずれにせよ生理学的リズムのなかで乱暴な扱いを受けずにこれた子どもは、おのずと禁欲的になります。哺乳類すべては禁欲的なのです。そうだからこそ、ある人間が禁欲的でないということは、ひとつの言語なのです・これは解読されるべきですね。

ほかに流布している考えでよくないものがあります。お母さんを喜ばすために、身体がなにか一たとえば、うんちやおしっこを一生み出すべきではありません。これは大人の要求の倒錯です。にもかかわらずこれは精神分析の本という本に出回っているのです。「これは最初の贈り物です、だからそれを評価しなければなりません、ブラボー、よくやった、なんて君のうんちはきれいな」などなど。子どもを腑抜けにするようなこういうありとあらゆるコメディが存在します。子どもはしかし、自分のうんちが美しくも汚くもないことをちゃんと知ってますよ。うんちがある、それだけです。

ぎゃくに下痢症の子どもは抑うつ的です。それはその大便がきれいな形をしていないからだけでなく、下痢をまえにしてお母さんが心配しているので、抑うつ的になっているのです。下痢をすることはがっかりさせ、意気消沈させることがらです。でもそれはべつの話です。

言い方をかえるなら、うんちは美しくも汚くもありません。大便をすること、これは元気のしるし、それだけです。ぎゃくに心理療法ではうんちはおもしろい利用方法がありえます。たとえば子どもがなにか粘土で作って、これとかあれとかを作りたかったんだけど、先生には分からないでしょう、と言ったら、あなたは「よく分からないわ。分かるのはそれがうんちに似ているってことね。」と言えます。子どもはかならず大喜びしますよ。つづけて「これはだれのうんち？だれがしたの？それはパパ？なんとかさん？」と言います。ついに犬の糞、牛の糞、ハエの糞を見分けることができるようになります。すばらしいことです、肛門欲動が言語と観察のなかで、昇華されるにいたるのですから。

これこそが肛門的欲動を昇華するということなのです。まずは興味をもつことからはじめなければなりません、はじめに快を感じる必要があります、でもことばにしてみるなら、これはもうすでにべつのことがらです。つづいてこの欲求は肉体をもつすべての存在が持っているものであると認める必要があります。

人類にかんして言うなら、この肛門欲動から人はなにを生み出すのでしょうか？われわれがなにかを操作したり排出したりすることへの関心を、なにかの形を変えるという関心に置き換えるということです。肛門欲動が生み出す形によって、われわれはクリエイターな

のだという発見の驚きをもってね。そしてある人間が問題になっているなら、それはだれかべつの人物への同一化なのです。それが肛門的な去勢です。でも子どもが望んだときにおしっこやうんちをさせないという意味ではまったくありませんからね。それはクロマニオン人女性としてふるまいながら20世紀風だと信じているようなものです。

これは生きるリズムと存在の肉体面において、子どもを切断してしまうということです。これはしつけではありません。「くそつたれ」お母さんたちはじつは怠けもので、子どもを変えようとする気になりません。そして子どもにこのような切断がなされればなされるほど、その子はよりかわいらしくなってしまう、お母さんたちは誇りにして近所の人にこう言うのです「あのね、うちの子、すごくかわいいでしょ、もう清潔なのよ。」

子どもにとってしつけとは、その時がひとたびくれば、大人のように排泄物にたいしてふるまうこと、つまり、排泄物のために用意された場所へ行くことを意味します。しかし排泄物のその後がどうなるのかを子どもが知っている必要があります、なぜ排泄物は便器のなかにされるのかを理解する必要があります。そうでないと意味がありません。まえは自分のなかにあったあるものを欲していて、その後はそこから出て行ってしまふ、あの穴はなんなのか？それらすべてを説明する必要があります。

すべてはことばにして言われなければなりません。一般的に田舎でそれはとても明白なことです。子どもは野菜が成長するのにそれが役立つのを見たり、それが堆肥のうえに置かれるのを見ているのです。でも都市では小さい子に窒素の循環について説明し、両親とおなじようにトイレにおいてくるまでは排泄物の主人は自分であることを説明しなければなりません。水洗トイレの装置は子どもの多くにとって劇的なものとうつります。なぜなら水を動かすのが子ども自身ではないからです。うんちをするときの赤ん坊はぎやくに、おしめの空の水洗装置を赤ん坊自身で作動させたのですから。それに小さいときから子どもは欲求とはなんであるかを知り、それはおしめに向かうということを知っているのですからね。

それで括約筋を使って清潔を保てるようになるころには、子どもは形をつくるのにたいへん器用な手を持っているものです。指があるおかげで括約筋ともいえる手というのは、なにか材料を形にしたりそれをこねたりしますが、これは以前の括約筋の関心が、その材料に移動したものなのです。

肛門欲動の変形のはじまりは手を使ってなにかを作ることにあります。すべての子どもがなす最初のこと、それは子どもが知っていようがまいが、うんちです。それは肉体がしているものです。このとき以降、象徴化がなされ得るのですが、それは大人がうんちという部分対象そのものには関心をしめさない、たえず「うんちした？」と訊かないという条件下においてだけです。よくご存知でしょう、強迫神経症的家庭があつて、そこでは朝食のときお父さんが「あれはどんなふうだった？」と訊くんですよ。

これはおそらく16世紀、コレラの時代にさかのぼるようなことでしょう。その時代にはこうやってこの病気のどんなささいな兆候も見逃すまいとしたのです。でもいまそれを

するなら、立派な強迫神経症です。こういう家庭で育った子どもは、この家族的行動の異常性に気づくことがたいへん難しいです。

これはむさぼるように喰う母親を持った子どもと同様です。うんちをお母さんに与えること—お母さんはうんちをむさぼる—があまりに誇らしいことなので、たとえば子どもは食事の最中に食べるのをやめてうんちをします。これこそ食卓での椅子の下にあるしびんの症状です。ここにもまた、口唇と肛門の昇華の混同があります。わたしはある統合失調症の男の子を思い出します。お母さんは彼が清潔であることを望んでいて、またしびんが金属製なのでお尻が冷たくないようにとと思っていました。それでお母さんはかまどの隅に、鍋がならんでいるところにしびんを置いていました。食事の用意がされているあいだ、その子は自分のしびんを探しにいき椅子の下において食べ始め、それから降りてしびんへのっかり、また食べて、また降りてのっかり、を繰り返していました。はじめから、この子のなかでは食べ物をいれる容器である鍋と、大便をいれる容器であるしびんとのあいだに、混同があったのでした。

口唇的な去勢とは、身振りによる象徴性にゆきつきます。子どもの去勢からカニバリズムのタブーははじまるのです。カニバリズムは口唇的な、かつことばによるコミュニケーションに置き換えられます。

肛門的な去勢とはけっきょく形を変形することの去勢であり、他者の身体を侵害することの去勢なのです。他者の身体に攻撃を加えることを禁じること、ですから殺人の禁止は、肛門欲動の昇華からはじまります。はじめに物体を変形すること、切ること、攻撃を加えることに置き換えられます。これは対象への満足を去勢された肛門欲動をめぐるなされ、かつ表象にむかった肛門欲動をめぐるなされます。しかし決して生きた動物や人のからだにたいしてではありません。人が自分の考えのままにつくったり、変形したり、切断したりするのは、動物や人間のからだにたいしてではないのです。